

生存科学研究 ニュース

VOL. 6. NO. 1. 1991. 1. 10. 発行

発行：財団法人 生存科学研究所

〒104 東京都中央区銀座4-5-1

聖書館ビル 303

電話 03-563-3518

賀 正

新年おめでとうございます。

「生存科学研究ニュース」も新しいスタイルとなりました。生存科学研究の近況をできるだけ早くお伝えできるよう心掛けますので、これまで通り御愛読ください。

生存科学シンポジウムのお知らせ

第1回生存科学 シンポジウム

日時：平成3年1月20日（日）
午前10時～午後5時30分

場所：上智大学10号講堂

午前：特別講演2題

「生命科学の将来」渡辺 格講師

「宗教と生存科学」柳瀬陸男講師

午後：4分科会と総合討論

「生存の哲理」「健康と家庭」

「医業問題」「産業環境と生存」

入場： 無料

会員以外の方でも入場できます。

会員諸兄には、関連する問題に関心をお持ちの友人方にも御紹介頂き、御参加をお勧め下さい。

武見奨励賞授賞

公益信託武見記念生存科学研究基金は、生存科学の研究と実践に顕著な功績のあった方への武見記念賞と、それに献身的な努力をしている方への武見奨励賞とを隔年に授与しており、今年度は武見奨励賞授与の年である。

平成2年12月6日（木）午前10時より奨励賞に推薦された方々の選考委員会が開催され、7件の候補者の中から2件が授賞対象者として選ばれ、引き続いて開かれた基金運営委員会において授賞が決定された。これを受け、12月20日（木）午前10時30分より研究所において授賞式が行われた。

今回の受賞者は厚生省人口問題研究所の花田恭氏と、早稲田大学の土方正夫氏、神戸芸術工科大学の斎木崇人氏、京都大学の掛谷誠氏の3名による研究グループの2組。花田氏は、人口統計に社会経済的要因を加味した分析を行い、死亡水準低下と社会経済的要因・変化等、生存科学の基礎的資料の開発とも言える分野を研究した。その努力が評価され、また将来の成果が期待された。土方氏等の研究グループは、北上川流域文化等の調査を行い、人間生存の諸条件を満たす合理的な地域環境のありに関する研究した。その研究と地域環境改善への実践が評価され、また将来の成果が期待された。

今回は極めて優れた候補者、6名1組が推

薦されたが、奨励賞としては第1回目ということもあり、前記の方が選ばれた。また候補者の中には武見記念賞候補といえるような方もおり、奨励賞より来年の記念賞向きであるとして今回選外となったが、記念賞への再推薦が期待される。

第54回生存科学研究会
いのちを考える—仏教と医療の接点
大正大学教授 藤井正雄

平成2年11月17日(土)午後2時より大手町経団連会館において表記のテーマで第54回生存科学研究会が開催された。

講師藤井正雄教授は、大正大学文学部教授で、日本宗教学会常務理事の他多くの学会、役職において活発な活動をされている。研究の専門領域は死生観。(葬墓をファインダーにして、くり広げられる家族形態の変化、儀礼、死生観の総合的研究)今回研究会へは、日本生命倫理学会での活動を機に江見教授、青木教授から紹介された。

藤井教授の講演は、限られた時間内に、非常に多くの、しかも互いに密接に関連した仏教の知識を巧みに紹介しながら進められたもので、それをこの紙面で要約することは極めて困難であるが、一応話の筋道を以下に紹介する。

* * *

統計によれば、日本人のかなり多く(約8割)が信仰を持っているかまたは宗教心の必要を認めている。宗教は教義と儀礼と教団があり、それ等は切り放せない関係にある。しかしそれが社会に広まる段階で、仏教の例で言えば、教義の比重が薄められた生活仏教という形となっていく。「いのち」を考えると、教義仏教で考えるか、生活仏教で考えるかで変わってくる。

教義で考えれば、「いのち」は色受想行識の五蘊が仮に和合したもので、縁によって作られたものであり、縁によって解かれ、生本死中の四有を輪廻する。死(死有)は輪廻の

中の本有から中有(中陰)への変わり目に過ぎず、浄土への六道輪廻の途中である。もっとも民衆は中有の中を中ぶらりんと理解し、魂が迷っていると考えることもある。

五輪の塔に見られるように、人間も万物も空風火水地の五の要素から成ると考えるので、土葬、水葬、火葬、風葬のいずれもができる。五蘊仮和合の考えから体には重きを置いていない。釈迦の前身である雪仙童子は仏法の心理のために捨身をしている。捨身はまた布施であり、三輪清浄三輪空寂(施す者、施物、施される者が、何れも清らかで執着がない)でなければならない。死生一如、身心一如で、生も一時の位、死も一時の位であり、「今」こそが大切である。

このような理解から臓器移植の問題を考えると、施す者の立場からは臓器提供は教義に反しないと言えるが、体は「いのち」の一部であるという考えもあり、これからは臓器提供は教義に反することになる。また施される者の立場で、そこに執着があれば教義に反することになる。さらに臓器提供者の家族には情緒的な面が入る。「まだ死んだとは思えない」という心情があろう。民衆がどういう文化を持ってきたかということをやなおざりにはできない。

釈迦は知りえぬことを語らなかつた。また悟りについては簡単には語らなかつた。仏教では常断を排す。(一方への断定はしない)人をみて法を説けとも言う。仏教は状況倫理である。それぞれの状況に応じて、教義に照らして考える。臓器移植についても一律には言えない。

* * *

質疑では、老人の病氣と人間の回復力の問題、仏教とキリスト教との相違点類似点等が議論されたが、講師はさらに、仏教では生死を分けて考えない、生(体)の中に死があること、南方仏教では新陳代謝も死と考えることを紹介された。また仏教では己の「いのち」を最も大切に考えること。生命の尊重は己の「いのち」の尊重であり、それを

諦観（あきらかに見る）することで（他者により）生かされている己の「いのち」に気づき、それから他者の「いのち」の尊厳も生まれてくる、と説明された。

なお次回の研究会は、1月20日（日）の「生存科学シンポジウム」になる。

平成2年度合同顧問会

平成2年11月16日（金）午前11時より午後1時迄、研究所において、平成2年度の基金・財団合同顧問会が開催された。生存科学研究に求められる総合性から、基金と財団の顧問は機能的に一体であり、またハーバード大学武見国際保健講座のためのハーバード日本委員会の委員を兼任している。

現在の顧問は以下のとおり。

板垣與一 八千代国際大学学長、*
一橋大学名誉教授
井深 大 ソニー（株）名誉会長
岩佐凱実 （株）富士銀行相談役
大江精三 前日本科学哲学学会会長 *
小西新兵衛 武田薬品工業（株）会長
近藤次郎 日本学術会議会長
中村 元 東京大学名誉教授 *
H. H. ハイアット ハーバード大学教授
松前重義 東海大学総長
宮島龍興 前理化学研究所理事長、
元筑波大学学長
向山定孝 三井業際研究所常任委員
W. レオンティエフ ニューヨーク大学教授
渡辺 慧 ハワイ大学名誉教授 *
渡辺 格 日本学術会議副会長
（*印は基金顧問）

いずれも大変御多忙な方々であるが、今回板垣、大江、小西、中村、渡辺（格）の諸顧問が出席。

財団及び基金からは熊谷基金運営委員長兼財団理事長始め、筑井、山口両副理事長、小平専務理事、田村、中山両常務理事（何れも運営委員兼任）が出席、さらに所管の官庁である科学技術庁の波川鎮男研究開発局ライフ

サイエンス課課長補佐、塩溝典子長官官房総務課広報専門官が招待され、また基金の信託受託者として大吞秀城三井信託銀行信託部付部長、高田保典信託部課長も出席した。

会議は運営委員長兼理事長ご挨拶の後、現況として以下のごとき重要な項目の総合的説明が行われた。即ち、基金・財団の現在の研究項目とその相互関係と運営。生存科学研究会開設から今日に至るまでの研究運営の主体の変遷。研究の進捗状況。ハーバード大学、レオンティエフ教授との共同研究の位置付け、である。

さらに研究項目の概要として、主として基金で行う広義のライフサイエンスとバイオエシックスの研究。財団が現地との共同で行う（地球・自然・産業・文化）環境・資源・人口等の生存条件研究手法の整備。地域生活構造と自治体等に関わる地域生活の条件整備。地域生態研究に基づく地域健康の実践対応。そしてそれらを総合して新しい生存システムやモデルの組み立てたり、従来からのあらゆる枠組を止揚する総合的研究体制を創出するという目標と体制が説明され、その何れもが互いに関連しあい、何の一つを抜いても不十分になるという点が強調された。

個別問題としては、ハーバードとの共同研究に関して、故武見太郎先生が、当初から極めて厳しい態度で臨まれたことが解る書類が発見され、現在財団の進んでいる道に間違いがないと判明したことが紹介された。

このあと顧問の方々から「生命」や「生存」の意味とその表現の仕方、地球を含めた環境のとらえ方、生存科学研究の進め方等につき貴重な御意見が出された。

第2回医薬問題研究会

平成2年11月5日（月）午後3時より、第2回医薬問題研究会が開催された。

今回のスピーカーは東邦大学医学部公衆衛生学教授豊川裕之委員で、栄養思想と新しい健康観、栄養の要素論、食品の機能性といわ

ゆる機能性食品等について話題を提供し、その後メンバー間の討議が行われた。

医薬品として法定されたものだけが医薬品である、という考え方では狭いとする発想から、今回は栄養・機能性食品に話題が進められている。

第2回 家庭問題研究会

11月19日(月)午後6時より、第2回家庭問題研究会が開催され、小玉香津子委員と横田俊一郎委員より、生存研が作成した市原市『市民の健康づくりシンポジウム』報告書を充実させる以下の意見が述べられた。

小玉委員は、ヘルス・ニードの傾向は各人の不健康なライフスタイルや生活習慣、環境公害に由来する健康問題が主流になりつつあり、それに対処するには、健康教育に代表されるような、人々が学ぶのを助ける手段や、個別の安全を見守る事が有効と思われる。権利としてのセルフケアを尊重しなければならない、と述べ、横田委員は、家庭の健康の意義、家庭の健康の基準、家庭の健康を増進するための具体的施策について報告した。

次回は平成3年1月10日(木)午後6時より。

第3回メディコ・エコノミックス研究会

11月27日(火)午後3時より、第3回メディコ・エコノミックス研究会が開催された。今回は前回の発表者左奈田幸夫委員が、前回の「医療の価値付け」第1回目「医療と経済学、報酬と技術料、価値と価格」に続く「医療の価値付け」第2回目として、「医療技術評価とその価値付け」を欧米の情報を中心に話した。

左奈田委員は、先ず第2回世界医療経済学会の状況を紹介し、次いでドラッカーの言葉を引用しながら、現代の生産要素はマネジメントであると説明。さらにコストの理論的

根拠、機会コスト、限界コスト、コストの種類等につき説明。その後全員で討議をおこなった。

次回は平成3年2月の予定。日時、演者は未定。

ハーバード大学武見講座活動報告

報告者 津谷フェロー

武見サチ・ゼナ

- 10/15 Discussion of the Commission's Objectives and Current Follow-up Activities / E.Putnam
- 10/22 Stimulating Research in Developing Countries:The Experience of the Applied Diarrhoal Disease Project / R.Cash
- 10/29 Maternal Health Care Utilization in the Middle East:A Comparison of Jordan and Morocco / C.M.Obermeyer
- 11/5 Niakhar:Example of a Population Laboratory in Senegal / M.L.Garenne
- 11/19 Priorities in AIDS Prevention and Control in the 90's:Implications for Research / J.Mann

武見オーム

- 10/3 Setting up our National Health System / O.Ransome-Kuti

特別調整企画委員会準備会

12月13日午後6時30分より、研究所会議室で表記の会議が行われた。この委員会には、研究所が行うこれからの各種研究の準備、枠を超えての調整、結果の総合化を受け持つことを主な目的として執行部内に設けようとするもので、今回は、そのメンバーの一部を担う、生存科学に熱心な、枠を超える思考に関心の強い各官庁の有志を招き、財団側執行部の説明の後、この委員会のあり方につき討議が行われた。